

# ハイマート Heimat

## ぐんま日独協会 会報

【 故平形名誉会長追悼特集 】

2013年7月3日

# 42号

発行者 鈴木 克彬

発行所 ぐんま日独協会

〒371-0105

群馬県前橋市富士見町石井 2445-219

電話 : 027-288-4297

E-mail : info@jdg-gunma.jp

ホームページ : <http://www.jdg-gunma.jp/>

ホームページ右下『ハイマート』から本誌をカラーでご覧いただけます。



2011年4月日独協会訪日団と北軽井沢にて（後列中央左の丸囲みが故名誉会長）

1. 会長あいさつ	2
2. 故平形義人名誉会長の死を悼む	
2-1. 鈴木克彬 ぐんま日独協会会長	3
2-2. 木村敬三 全国日独協会連合会会長代行（元駐独大使）	3
2-3. 橋本孝 とちぎ日独協会会長（全国日独協会連合会副会長）	4
3. 第5回ドイツフェスティバル in ぐんま	
3-1. 音楽コーナー	5～6
3-2. パネル展示コーナー	7
3-3. ドイツ人の目からみたドイツフェスティバル	8～9
4. ドイツ人クルップ先生の死を悼む	10
5. デザイナー修行奮闘記（連載-2）	11～12

## 1. 会長挨拶

### 平形義人名誉会長を偲ぶ

・・・ 折り目正しいお人柄 ・・・

会長 鈴木克彬

『品格』という言葉の定義はよくわかりませんが、平形先生は、我々には真似の出来ない品格をお持ちの方だったと思います。初対面の方々にも礼儀正しく、丁寧に対応されたそのお姿は、今でも臉に浮かびます。本当に得難い方を失ったものと、残念でなりません。心から哀悼の意を表します。

先生のご功績につきまして、告别式の際に拝読させていただいた弔辞を、別途、当ハイマートに掲載させて頂きました。

### 『第5回 ドイツフェスティバル in ぐんま』 無事終了

・・・ 会員及び関係者のご尽力に感謝 ・・・

会長 鈴木克彬

平成25年5月31日(金)、6月1日(土)、2日(日)の3日間、群馬県庁ホールで開催された『第5回目のドイツフェスティバル in ぐんま』は、会員及び関係者皆様のご協力、ご尽力を得て、無事終了することが出来ました。改めて、当機関誌ハイマートを通して、厚く御礼申し上げます。

特に今回は、ぐんま日独協会オリジナル製作の『岩倉使節団その意義と役割パネル20枚展』を行い、来場された多くの方々から、その内容について、多くのお褒めの言葉をいただきました。“明治政府は、日本発展の師を何故ドイツに求めたか”を1年間かけて楽しく学ばせて頂きました。

その他例年の如く、ドイツ音楽会、ドイツ輸入品の紹介・販売、ドイツ各種自動車の展示等を行い、延約6000名のお客様をお迎えし、成功裡に実施出来たことをご報告致します。

当ドイツフェスティバルは、隔年開催としておりますので、次回は平成27年(2015年)を予定しております。今後ともご指導、ご協力の程、よろしくお願い致します。

事務局より

4月21日(日)に県庁昭和庁舎において定期総会が開催され、議案は提案どおり承認されました。総会后、鳴崎 郁 元駐独日本公使(現 群馬県警察本部長・弊協会会員)による講演が「海の外から見た日本」と題して行われました。ドイツのほかスリランカでの経験も含めて多角的な目を見た日本の姿をわかりやすくお話していただきました。

## 2. 故平形義人名誉会長の死を悼む

### 2-1. 弔辞（鈴木克彬 ぐんま日独協会会長）

ぐんま日独協会名誉会長平形義人先生の御霊に対し、心から哀悼の意を捧げるとともに、弔辞を拝読させていただきます。

丁度一週間前の4月21日の日曜日、前橋の昭和庁舎で行われた講演会に平形先生は元気なご様子で、出席されました。そして翌日には、私は平形先生とお電話でお話を致しました。それなのに突然のご逝去とは、ただただ驚くばかりです。

平形先生は、日本医学会の重鎮、高名な故石橋長英先生の愛弟子として、まだ海外旅行がままならぬ昭和32年、35年、38年と三回も、ドイツ医学事情視察のため、石橋先生とご一緒に訪独され、その後は国際医学協会評議員としての幅広いご活動等、日独医学交流発展へ大きな礎を築いて下さいました。

訪独の折のエピソードとして、交歓パーティー等での、平形先生のお仕舞は常に大好評で、ドイツの新聞等に度々報道された、とも伺いました。

一方平形先生は、地元群馬県において、前橋市の医師佐藤進一先生、沼田市の医師故角田勤先生、草津町の故中澤晃三先生方と相計らい、『ドイツ好き集まれ』の掛け声のもと、昭和63年ぐんま日独協会を設立され、会長職を二十年間、誠意をもって勤めてくださるとともに、全国日独協会連合会副会長の要職も全うされました。また、文化面でも、群馬県とゆかりのあるドイツ人医師ベルツ博士や建築家ブルーノ・タウト氏の研究者等に対しても、物心両面で面倒をみておられた、とも伺っております。その多くのご功績に対し、群馬県人では初めて、ドイツ国ケラー大統領より、平成20年5月『勲1等功労十字章』が授与されました。

先生のお人柄は、面談されるすべての方々にとって親切で、その礼儀正しい対応振りは、今でも多くの方々の心に残っているものと思われまます。

平形先生、本当に長い間ご指導いただき、有難うございました。日独協会関係者を代表し、安らかなご冥福をお祈り申し上げ弔辞と致します。

平成25年4月29日

全国日独協会連合会副会長・ぐんま日独協会 会長 鈴木克彬

### 2-2. 平形先生の思い出（木村敬三 全国日独協会連合会会長代行、元駐独大使）

私が平形先生と最初にお目にかかったのはかなり昔のことになる。それは先生が石橋長英先生と御一緒にドイツを訪問されたとき、当時大使館で文化担当書記官のこともあってお世話した時だった。その後私がドイツ勤務を終えて外務省を退官し、当時の日独協会の副会長であった園田さんのお勧めもあり、もう一人の副会長として民間での日独友好に携わることとなったのが1992年であった。思い出すのは確かその年の秋、当時のドイツ大使だったハース氏とともに群馬に招待され、伊香保温泉の金太夫さんのところにお世話になり大変おもてなしを受けたことである。その後先生は極めて熱心にぐんま日独協会の会長として同県とドイツとの民間レベルの友好交流に尽くされた。その思い出を数え上げればきりが無いが、とくに思い出に残るのはドイツ側との会合の際たびたび能衣装で舞われた能舞のお姿や、多数のドイツ側の出席の下に開催された草津での連合会総会の際の活躍振り、又その功績に対してドイツ側より功労十字賞が授与された際のこと等昨日のことのよう

に脳裏に浮かぶのを覚える。平形先生、ゆっくりお休みください。先生が日独関係に尽くされた道を、我々後輩のものどもも今後ともたどってゆくのを天上から眺め、且つ指導してください。合掌。

### 2-3. 平形先生のご逝去を悼む (橋本孝 とちぎ日独協会会長、連合会副会長)

ぐんま日独協会の對馬さんから平形先生の訃報が飛び込みました。初めは信じられず、深い悲しみに包まれ、次々と先生のことが思い出されました。

今から18年ほど前のことです。ミュンヘン大学を中心にバイエルン州の学生たち15名が、栃木県石橋町(現下野市)での日本文化夏季講習にやって来ました。その時、ミュンヘン大学から、「ドイツ人学生に座禅を体験させたい、どこかお寺はないか」と言われ、栃木県内の寺を探しましたが、外国人に座禅をやらせてくれるところはありませんでした。そこで、平形先生にお願いしましたら、少林寺山達磨寺に頼んで下さり、実現しました。5日間の予定でしたが、座禅をすると、1日で学生たちは音を上げ、もう帰りたいという始末でした。

その時、平形先生が、舞を舞ってくださったのです。宝生流仕舞。心が和むひとときでした。その当時、ドイツの若者にはその舞が何のことか分からなかったと思いますが、それによって5日間耐えたのです。次の年は参加者の座禅をやる態度が変わりました。朝早く起き、祠をめぐり、座禅の時にはちゃんと合掌をし、警策で打って欲しいと言い出したのです。

その参加者の中に、現在、ハンブルク大学日本語学科の教授になったガビー・フォークトさんもいました。「覚えている?」、「ええ、よく覚えています」とガビーさんの弾む答えが返ってきました。

2003年のブラウンシュヴァイクでの独日協会連合会総会の席で、先生は再び仕舞を舞って下さいました。ブラウンシュヴァイク独日協会20周年記念でもあり、多くのドイツ人や日本人が参加し、先生の舞は深い感銘を与えたのです。ただ、ドイツ語での紹介が、「獅子舞い」だったので、先生は後で、「あれはちがう、仕舞だよ」と残念そうに言っておられました。

2011年4月、日独パートナー会議が奈良でやると決まり、その準備を進めている最中にあの3・11です。ドイツ連合会の旅行も中止になるかと思っていきましたら、「こんな時こそ日本へ」の一言で、決まりました。日本側の窓口が對馬さんと私でした。ドイツ側はマリアンネ・メンヒさんとゲーザ・ノイエルトさん。旅行のルートは東京、横浜、鎌倉、川越、群馬、松本、飛騨を通過して金沢、長浜、京都、奈良でした。

群馬での宿は、孀恋村のホテルグリーンプラザ軽井沢に決まりました。その時、平形先生の舞が見たいという要望がドイツから来たのです。平形先生はご高齢だからと言いましたが、どうしても先生にお目にかかって、舞が見たい。すぐ、鈴木会長や對馬さんをお願いしました。そして、当日、子どもたちの元気な太鼓の演奏の後、平形先生が、凛々しいお姿で、舞台に立ち、仕舞を舞って下さいました。これまで見た先生のどの仕舞よりも素晴らしく、能の極致を見る思いでした。日独の友好に尽くされた先生のお姿と重ね合わせながら、ご冥福をお祈りいたします。ありがとうございました。

### 3. 第5回ドイツフェスティバル in ぐんま

#### 3-1. 音楽コーナー (吉田 博文 記)

音楽関連イベントでは、合唱団の発表、日独協会会員によるクラシック音楽コンサート、一般参加のかたによるコンサート、そしてフォークダンスの発表などが行われました。

今回も県庁一階のロビーにて、土日の二日間にわたって、さまざまな音楽を県民のみなさんに楽しんでいただきました。バッハ、ベートーヴェンなどの作曲家によるクラシック曲はもちろん、私たちが日ごろ慣れ親しんでいる曲なども多くありました。「あっ、これドイツの曲だったんだ!」と改めて思われるものもあつたのではないのでしょうか。

コール詩音による合唱では、バッハの『主よ、人の望みの喜びよ』など、美しいハーモニーによって演奏されました。ドイツでは教会での音楽が沢山ありますので、このような響きはドイツの一般の人々にもとても親しまれています。



また協会会員によるコンサートでは、声楽やピアノによって、ヘンデルの『オンブラマイフ』、ベートーヴェンのピアノソナタ、シューマンやブラームス、R. シュトラウスなどなど、クラシックの名曲が演奏されました。曲の素晴らしさはもちろんですが、専門の音楽家の洗練されたテクニックや表現力に、心を奪われた聴衆の皆さんも多かったことと思います。



「みんなで奏でよう♪ドイツ音楽コーナー」として、一般の方にも演奏に参加していただきました。小さなお子さんから大人まで、幅広い年代のかたに出演いただき、聴くほうも身近に感じながら大きな拍手が送られていました。今回初めて出演の



ハンドベル教室前橋の皆さんも、ローライなどを優しい音色で奏でてくれました。人前で演奏するのは初めて、というかたもおり、緊張されながらも、音楽することの面白さを味わってくださったことと感じています。

フォークダンスも披露していただきました。素朴な音楽と、リズム感が心地よく見ても心が浮き立つような時間になりました。ドイツ的な色鮮やかな衣装も、会場に花を添えていました。



ドイツでは教会の音楽会、ホールでの演奏会、劇場でのオペラ演奏など数多くありますが、それにちょっとしたお祭りにも沢山の音楽があります。何かあれば皆で集まりホームコンサートをしたりして、気楽に音楽を楽しむ文化があります。演奏会にドレスアップして出かけるのを楽しみにしている人もいますし、趣味の楽器、コーラスの練習をしたあとビールで乾杯を楽しみにしたり、家族の団欒で、演奏を聴きながらコーヒータイムをして、生活のなかに沢山の音楽があります。

今回のイベントも多くのかたに参加していただき、盛況のうちに終わることができました。これからも皆さんが、いつも音楽とともに生活を楽しんで、また次の機会に参加してくれることを願っています。Viel Spaß!



### 3-2. パネル展示コーナー（末永秀雄・マサ子 記）

今回のフェスティバルの目玉である岩倉使節団に関連したパネルを作成するにあたって、それぞれのパネルに適切な内容を盛り込むために、なるほどそうだったのかと、私たち自身が納得のいくまで繰り返し議論して、やっと20枚のパネルが完成しました。



岩倉使節団は明治4年から6年にかけて米欧を視察して、ドイツのビスマルクから万国公法の裏側に隠された真実を学んで、日本はドイツを模範にするのが一番良さそうだと判断して帰国しました。このことは、今から約140年前のことですが、現代社会にも脈々とつながっていて新鮮さと親近感を感じます。



来場者からは次のような反応がありました。

- ・学校で習わないことが分ってよかった。
- ・フルベッキのことは初めて知った。
- ・小栗上野介も米欧を視察しているけど、もっと知りたいな。
- ・新島襄も岩倉使節に関係があったんですね。はじめて知りました。
- ・久米美術館はどこにあるんですか。そこでは常時展示しているんですか。
- ・2日間だけの展示では、このパネルもったいないですね。



私たちも、温故知新で過去の歴史を詳しく知ることにより、現在を正しく認識し、そして未来を展望する知恵と元気を少し頂けた気がします。

### 3-3. ドイツ人の目からみたドイツフェスティバル (タベア カウフ 記)



5月31日(金)～6月2日(日)、ぐんま日独協会主催の「第5回 ドイツフェスティバル in ぐんま」が群馬県庁県民ホールで開催されました。二年前初めて参加した私にとって、今年は二回目の参加となりました。

今年は「日本を変えた岩倉使節団」というタイトルのパネル展が一般公開されました。歴史についてのパネルだと、多くの見学者はちょろっと目を通すだけで終わるかと思いましたが、メモを取りながらすべて真剣に読んでいた方も少なくなかったです。岩倉使節団は海外でも有名ですが、それに先立って、多くの専門家が外国に学びに行きました。明治時代の日本とドイツの関わりが本当に面白いと思います。

私は二年前と同じように、ドイツ輸入品ソーセージの販売を手伝いました。すべて美味しいソーセージばかりでしたが、私が特に好きだった「ニュルンベルガー」が一番早く売れ切れました。「おススメは？」と聞かれたとき、いつもそのニュルンベルガーを薦めたせいかな？隣のドイツパンも大人気でした。日本で「ドイツパン」とも言われている位、ドイツを代表している黒パンは既に土曜日に完売でした。朝10時から午後5時までいつも大勢のお客さんがこのドイツ輸入品を訪ねました。



しかし、音楽やフォークダンスの披露の時間が近づくと、参加者がみんなブースから離れて、観に行きました。普段見られない素敵な演奏だから、当然なことですね。特に、ドイツフォークダンス実演が印象的でした。鈴木会長ご夫妻の元気で楽しそうなダンスを見て、ドイツへの愛を感じて、とても嬉しく思いました。

因みに、私は今回、友達から借りた南ドイツの民族衣装「Dirndl」で参加しました。ベルリン出身の私は当然自分のDirndlを持っていないし、ドイツでオクトバーフェストにも行った事はありません。歴史的な理由で、ドイツは地方によって文化がかなり違いますが、外国に行くと、南ドイツのイメージが一般的に密着しています。自分のドイツの文化と全く関係ありませんが、Dirndlはとってもおしゃれだと思います。そして、参加者の笑顔を見て、着て良かったと思います。





今年ドイツと日本のロマンチック街道が姉妹提携して 25 周年を祝いました。ドイツフェスティバルでは、ロマンチック街道のセレモニーを行いました。ドイツから多くの関係者の方々、ドイツ大使館、観光局、群馬選出国會議員が来られました。セレモニーの後行われた素敵なパーティに参加させて頂きました。お互いコミュニケーションを取るために、ちょっとした通訳をしましたが、言語が分からなくても皆さんがとても楽しそうに食べたり、一緒にビールや美味しい群馬のお酒を飲んだり、ゼスチャアで話したりしました。やはりお互い気が合えば、言語なんて要らないですね。



自分のドイツ語能力を試すために、「ドイツ語お喋りコーナー」に寄ってくれた方々も多かったです。東京から 5 人の友達を連れてドイツフェスティバルに参加しました。統計局によりますと、群馬県に住んでいるドイツ人はわずか 28 人です。そう考えると、大勢のドイツ人が集まったおしゃべりコーナーは本当にドイツ人と話す貴重な機会でした。昔からドイツとの繋がりのある方も、最近ドイツ語の勉強を始めた方も、それぞれドイツが好きな理由がありました。皆さんのお話を聴くのがとても面白かったです。

ドイツが好きになったきっかけが色々違いますので、ドイツフェスティバルでも幅広い販売や展示のバリエーションがありました：ドイツのお茶、玩具、鉄道、アクセサリー、お菓子、ビール、車等。今回のドイツフェスティバルに参加した方々の中にも、きっとドイツの新しい面を好きになった方、ドイツを更に好きになった方、そしてドイツが好きという事に初めて気づいた方もきっといらっしゃったと思います。



最後にずっと一緒に働いていたぐんま日独協会の皆様に感謝したいです。群馬でいつも大変暖かく歓迎されていますので、元気を頂きます。ボランティアの力で、こんな大きいフェスティバルを実現できるのは本当にすごいと思います。また再来年も是非参加させて頂きます！

タベア（日独協会職員）

#### 4. クルップ教授の死亡広告（白倉 卓夫 記）

私の敬愛してやまないクルップ（Hans Klupp）教授がなくなられてはや一年が過ぎた。先生はオーストリア出身の薬理学を専門とし、ドイツ国内はもとより国際的にもよく知られた製薬会社ベーリンガー・インゲルハイム社の研究部門のリーダーとして活躍された。晩年はインゲルハイム郊外にあってライン河を望む静かなところに居を構え、奥様と過ごされてきた。

一昨年教授夫妻を訪れた時には90歳を超えた人とは思えないお元気な白髪、長身の先生が駅頭まで出迎えて私の訪問を喜んでくれたが、先生自ら運転されて昔の私たちの旧住居や思い出の深い場所を案内してくれたのが先生との最後の思い出となってしまった。1965年にベーリンガー社傘下のトーマー社研究施設に私が研究留学して以来今に至るまで公私にわたりお世話になったドイツの恩人だが、日本文化にも造詣の深い医学者でもあった。

奥様からの手紙には「夫はなんの苦しみもなく家族全員が見守るなか、安らかに眠っていきました」と書かれていた。当時新聞に掲載された先生の死亡広告（図）の右上には松尾芭蕉の一句「田一枚 植えて立ち去る 柳かな」がドイツ語で添えられていた。“Das ganze Feld / mit Reis bepflanzt-nun scheide ich / vom Weidenbaum (Matsuo Basho)”（早乙女たちが田を一枚植えて立ち去ったが、手際良さは柳の精のなしたわざだ）と解釈されている句だが、句の主人公についてはなおいろいろと議論の多い句だとされている。先生がどのような心境でこの句を自分の死にあわせてとくに選ばれたのか知る由もない。しかし私は先生が自分の死を予感しながら「私は一生を賭けて薬の開発に打ち込んできた。漸く自分なりの仕事を終えた今、満ち足りた喜びを感じながらこの世を立ち去っていく」という先生の達成感と家族への感謝の思いをこの句に託したのではないかと今思っている。

Das ganze Feld  
mit Reis bepflanzt - nun scheide ich  
vom Weidenbaum.  
(Matsuo Basho)

**Dr. Johann (Hans) Klupp**  
\*8. 5. 1919 †28. 1. 2012

In liebevoller Erinnerung:  
Jutta Klupp  
Bettina Klupp und Andrea Stumm  
Anne Klupp und Jens Donat  
mit Julius und Martin  
Nikolaus Klupp und Ingrid Simonitsch-Klupp  
mit Katharina und Christopher

55218 Ingelheim am Rhein, Frankenstraße 19

Das Requiem ist am Freitag, dem 3. Februar 2012, um 9.00 Uhr in der St. Michael-Kirche in Ober-Ingelheim. Anschließend findet die Beerdigung auf dem Friedhof in Ober-Ingelheim statt. Im Sinne des Verstorbenen bitten wir anstelle freundlich zugedachtem Blumenschmuck um eine Spende an den Förderverein RC Bingen, Kto.-Nr. 8228405, BLZ: 55070024 bei der Deutschen Bank, Stichwort: Hans Klupp. Von Beileidsbekundungen bei der Trauerfeier bitten wir abzusehen. Eine Kondolenzliste liegt aus.

芭蕉の俳句を添えたクルップ先生の死亡広告

—アルゲマイネ紙、ライン・マイン新聞社発行（2012.1.30.）—

## 5. デザイナー修行奮闘記 — 連載 2 (井上 晃良 記)

### ヨーロッパ研修旅行

高校を卒業後、1年の浪人生活を経て通った大学は、西ドイツのウルム造形大学の流れを汲む美術大学であった。私が学んだ機器デザインコースでは、コンセプト中心の機能主義的デザインであり、その本場である西ドイツという国への憧れを一層強くするものであった。その一方で、私が大学で工業デザインの勉強をしつつ感じていた大きな疑問が、幼少の頃から憧れていた西ドイツとそこにある鉄道車両や自動車、またブラウン製品に代表されるプロダクトのデザインの持つ一貫した機能美と日本のそれとは異なる理由を知りたかったことである。

その疑問と更なる決意が決定的になったのは、3年次の冬に行われたヨーロッパ研修旅行である。それは1985年の冬休みである。まだ、格安航空券などない学生時代に憧れていたヨーロッパへ、しかも幾つかの興味深い企業でのデザイン部門の見学もある。生まれて初めての国際線旅客機は、南回りではほぼ丸1日掛けて到着した。フランクフルト空港から更に乗継ぎ、オランダのアムステルダムスキポール空港へ、そこからバスで最初の目的地であるフィリップス本社のあるアインドホーフェンへ到着した。オランダに到着してから見るもの全てが新鮮に映ったのは言うまでもない。アインドホーフェンから初めて鉄道を利用して国境を越え西ドイツに入国。途中私の乗る車内から窓越しに見たインターシティの食堂車の車内風景があまりに優雅に見え、ヨーロッパの車両への憧れが更に膨らんだのは言うまでもない。西ドイツでは観光地や自動車会社のデザイン室を巡る旅程を過ごしたが、見るもの全てが学ぶべきものであるほど私にはインパクトが強かったのである。その後スイス、イタリア、フランスと約2週間の旅程をこなしたのであるが、私にとっては、幼少の頃からの憧れの国である西ドイツが最も印象が良く、この旅行を通して、もう一度西ドイツへ来て、この地でトランスポーターションデザインの仕事をしたいという強い気持ちが生まれたのである。

### 美術大学卒業と就職

私の将来への希望が強固になったきっかけである欧州旅行から帰ってまもなく企業実習が始まった。当時は、バブル経済直前の時期ということもあって、メーカーの学生募集は売り手市場であった。それでも人気のあったとある自動車会社に私を含めて3名のクラスメイトが5日間に渡る実習を受けたのである。そこでは会社側から出された課題に対してコンセプトからレンダリング迄のプロセスをカンヅメになって受けたのだが、最後にあった面接では丁度欧州旅行直後だったこともあり、ヨーロッパでの自身が感じた様々なることを率直に話す事ができたのはプラスに働いたようで、クラスメイトも含めて3人共その会社に拾ってもらったこととなった。だが、私にとって不審感が募ったのは、当時入社時点での配属先が知らされておらず、3ヶ月間の工場実習後になって初めてどの部署で仕事をするのかがわかった事である。この会社は自動車だけでなくバイクや汎用製品、更にはアクセサリ部門にもデザイン室がある。同期の中で希望した部署にならず愚痴をこぼす者も居た。私も多分にそうであったが、プ

ロダクトデザインが出来ることは確かなので、暫く身を任せることを決意したのである。その会社は、当時日本の他、北米と西ドイツに研究所を持ち、デザイン部署もあったことが希望の1つでもあったからだ。

大学卒業後、なぜ鉄道のデザインに進まなかったのかと言えば、日本国内に鉄道デザインを行う機関なり事務所を良く知らなかったことと、当時の私は色々な分野のプロダクトデザインに興味を持ち、同じトランスポーターションデザインの花形でもあった自動車のデザインにも興味があったからである。

### 自動車企業への就職

ここでは、先輩デザイナーにしごかれながらインハウスデザイナーとして2年半を過ごしたのだが、ストレスも多く、その当時は帰宅すると「青菜に塩をかけたような顔をしている」と家族から言われたものである。この時、外と中から見る企業イメージにこれほどの乖離があることを初めて知った瞬間でもあったのである。

精神的にも少し余裕が出来た入社後1年経った4月から、会社が休みの土曜日を利用して自宅近くのドイツ語教室に通ってドイツ語の勉強を始めた。その少し前から見聴きしていたラジオやテレビのドイツ語講座も合わせて行い、本格的に勉強を始めたのである。今思えば、この時点で私のドイツ行きの計画は始まっていたとも言える。

ドイツ語を習い始めて8ヶ月後、会社の正月休みを利用して今度は高校時代の友人と2人で自ら計画を立ててもう一度西ドイツへ個人旅行をしようと企てたのである。今度の旅行の目的は、現地でレンタカーを借りてアウトバーンを走ったり、憧れのDBのInterCity列車に乗車したりするのはもちろんであるが、日本で手配したのは航空券と最初と最後の宿だけで、それ以外は全て自分達だけの力でやってみようと考えたのである。それまで語学学校やラジオ、テレビのドイツ語講座で学んだドイツ語能力を試す事と、本当にドイツで生活出来るのか、確認したかったのである。

文章に記すと用意周到で順調に見える留学準備であるが、2度目の旅行は現地で色々な人に助けられ、とても充実したものであった一方で、目的の一つである自身のドイツ語能力は惨憺たるありさまであったことを確認するだけであった。週一回通っていたドイツ語学校も1年過ぎても一向に上達していないのである。担任の先生に相談すると答えは簡単であった。「ドイツの語学学校に行けば良い。数ヶ月で話せるようになる」... と。その話を真に受けたのは私自身で、それがなければドイツ留学もしなかったかも知れない。

(続く)

(本記事はイカロス出版株式会社発行『鉄道デザイン EX 01』に掲載されたものを転載したものです。同社のご好意により転載の許可をいただいています。)